



SAIHIKA201707

# SAIHIKA201707

スプラトゥーン2をやるまえに原稿を書け

SAIHIKA201707表紙 鴿和 P.1

SAIHIKA201707目次 矢野ヒカル P.2

余生は潰えた物語の上で T.K P.3

A Wonderful Table. 矢野ヒカル P.8

キュウセイの魔女とその騎士 マウス P.15

余生は潰えた物語の上で

1:K

「ふいほはいえひっはっはへほ（つい大見得きつちゃったけど）」

シファが一步、二歩と後ずさる。自ら口に結んだ布のせいでまともに話すことはできない。つまり、神の名を発音しなければ神通力を使えないシファは、今はただのか弱き少女で、何の力も使うことができない。

彼女はオットエアの街で龍騒動に紛れて誘拐されたことを思い出していた。あの時も同じような状態にあったが、今回の相手は人間ではないし……そもそも、神通力があっても一度敗北した。

虎の姿をした魔物、ティグルスが遠ざかるシファに躍り寄ってくる。飛びかかられる間合いには既に入っているが、避けられることを考慮してかティグルスは確実に距離を詰めてくる。

まさに特質を発動しなければならない理想的な状況になってしまったが、これで簡単に発動してくれば、かつてのヒビナは苦労していない。

「……ひひへっはへは」

試みに神の名を呼んでみたが、もちろん神通力は発現しない。

身一つではどうやってもティグルスと渡り合えはしないが、神通力を使ってしまうえば修行の意味がない。かと言ってまた死にかけるのは絶対に避けるべきだった。

シファが考えを巡らせ、眼前の脅威への集中が疎かになったのを、ティグルスは見逃さなかった。

木の根が折れ、地面が窪むほど強力に地を蹴って跳躍したティグルスは、両前足の鋭い爪でシファに斬りかかる。不意を突かれた行動に、布を取って神通力を使えるようにする暇すら無い。しかも、左右どちらに逃げてシファの脚力では攻撃範囲から脱することはできないし、後ろに逃げるのは論外だ。

だから、シファは直感的に前足二本の間を縫うように前へ思いっきり走った。小柄なシファは、すんでの所で爪を躲して、低空で飛ぶティグルスの股下を潜り抜ける。

死ぬかと思った！ とこもった声で叫びながら、ティグルスからの大脱走が始まる。

シファの、その感覚は間違っていない。彼女は気付いていなかった。ティグルスの前足が、一瞬だけ何かに引っかかったように止まったことに。一般に特質を扱える人々にすら遠く及ばない程度の小さな小さな効果だったが、大きな大きな一歩だった。

その後も彼女の逃亡劇は続く。

闇雲に逃げるだけではなくに追いつかれてしまうので、木々によって自らの身体を視認されないように走る。ティグルスはその鋭い嗅覚と触覚で獲物の位置を把握することはできるが、シファほど小柄な相手であると視覚情報も合わせなければ捉えることはできない。

このことをシファも承知していたので、つまりは我慢比べが始まったわけである。シファの体力が尽きるのが先か、ティグルスが時間の無駄だと諦めるのが先か。はたまた、シファの特質が発現するのか――。

そして陽が頭上高くに昇る頃、シファの体力は限界に達していた。

「はあっ、はあっ……ほほははひやはひははは……」（このままじゃ埒があ

かない……」

かくなる上は、ともしもの時のために神通力で作っておいたナイフを、ジャージのポケットの上から触れる。

ずつと逃げ続けていたシファはここにきて反転、木々の陰から攻撃を仕掛ける。駆けるティグルスの真正面に飛び出したその時、

「はいやー」

猫特有のぶにやつとした鳴き声を上げながらティグルスは吹っ飛び、二転三転して転がっていく。飛び蹴りをかました少女は白銀の翼を羽ばたかせて地面に降り立った。

「ほふはん!?! (ソルさん!?!)」

「?!」

「は……あ……」

予想だにしない事態に、シファは例外的に布を口から外す。

「すみません。えっと、助けていただいたのは嬉しいんですけど、ソルさんはどうしてここに……?」

「そのきのうまで、ねてた」

ソルが指をさした先には、シファとティグルスの追いかけて直前になぎ倒された木があった。

「お風纏を邪魔してしまっただんですね……すみません」

「うん。いい。それよりわたしもあそびたい」

「遊んでたわけではなく……」

シファはこれまでの一連の流れを説明した。何とか特質を使えるようになるうとしてることを、そのために神通力を使わないようにしていること。

ただ、創造の神には今のが遊びに見えたのか、と内心ショックでもあった。

「というわけなんです」

「わたしもやる」

「え、でも神様には特質が存在しないのでは……行使する力そのものが、言われればその神様自身の特質のようなものですし」

「わたしはとくべつ」

ソルは目を見開いた。黄金の右目と深緑の左目が現れる。シファは背筋の凍るような寒気を感じた。

「私はひびなに名を貰ったから。本来、人の言葉での名を持たない私達が名付けられるとはそういうこと」

「では、その目が……」

「静止の炯眼。それが私の特質」

「おとぎ話にあるような、石化の魔眼のようなものでしょうか?」

「にってるけどちがう」

ソルは目を閉じた。

「せいしているというほんしつをみぬき、そのじょうたいにあるとするちら。じかんにかいにゆうするわけでもうんどうにかいにゆうするわけでもなくそのしゅんかんでのじょうたいをぎやくにかくていしてきょうせいさせる」

「へ、へー。そうなんですか。す、すごいですね」

「うん。じゃあ、いい」

「あ、待ってください……」

首を傾げながら振り向くソルは、シファには普通の女の子に見えた。目をつぶっていた方が自然というのもおかしい話だが。

心なしかウキウキしている感じがするソルに申し訳なく思いながら、シファが続ける。

「この修業、誰かに助けてもらっちゃダメなんです。自分の力でやらないときつと、特質は見つからない……」

「だいじょうぶ」

ソルは神通力で作り出したのであろう布を取り出した。シファが口に巻いていた、白くて何の変哲も無い布だ。それを案の定、シファと同じように口に巻いた。

「ほへへはふへはへはひ（これでたすけられない）」

「ええ……」

「ははふひほ（はやく）」

ソルが袖口をぐいぐいと引つ張るので、シファは仕方なくソルと共に行動することにした。自身も布を噛んで後頭部で縛る。こうして、奇妙な二人パーティが完成した。

そんな二人が新たにティグルスに出くわすのに、そう時間はかからなかった。グイエルラ樹海の奥地は彼らの巣になっている。ヒビナの住む小高い丘の家には絶対に近づかないが、それを囲むように縄張りが形成されている。シファとソルはその中を縦横無尽に逃げ回った。

ある時は自然にあるものを使って反撃したり、同士討ちを煽ったり……とにかく、その場その場の状況を「どうにかする」ことに専念した。そうすることによって、いつかどうにもならなくなるときにシファの特質が発動することを願って……。

「……………」

そうこうしている内に、日が暮れた。五匹目のティグルスを木の洞に嵌めて撒いたところで、シファが布を取る。

「今日は終わりにしましょうか」

「いいの？」

「はい。ソルさんを巻き込んでしまいましたし、一日帰ろうかと……」

ソルはシファの袖を掴み、物凄い勢いで首を横に振る。

「あしたもやる。それと……」

「？」

「しふあともおはなしたい」

「ヒビナさんの方がいいんじゃない？」

「ひびなもいいけど……」

いつも気ままでふわふわしているソルが、さらに曖昧でよくわからないことになっていった。しかし、ぐいぐいと袖を引き続けるソルの姿に、シファは思うところがあった。

「では今日は二人で寝ましょうか」

「うんうん」

そうと決まればと、ソルが神通力で周囲から薪になりそうな枝をかき集め、火をつける。ついでに落ち葉も集めて、上に大きくて分厚い布を敷いた。

「わーい」

ソルは簡易の布団に飛び込んだ。はぶん、と落ち葉が少し舞い散る。普段は周囲の目を気にして絶対にそういうこととはしないシファも、ソルが羨ましくなつて隣に飛び込んだ。

二人は並んで寝ながら、話し始める。

「ねーねー。しぶあはどつして、「こまでしてつよくなりたいの？」

「世界中のいろんなところを見て回るため、でしょうか。でも周りの人たちは絶対に許してくれませんから、力づくで振り切るため、でもありますかね」

「だからひびななんだ」

「そうですね。ヒビナさんは誰よりも強いですから。私からも一ついいですか？」

「もちろん」

「レミアさんと戦っている時から気になってたんですけど、ソルさんはなぜヒビナさんに力を貸そうと思ったんですか？」

「じゅうねんまえのこと？」

「……やっぱり、魔法使いたちの王とヒビナさんが対峙した時のことなんですかね」

「そう。ひびながわたしをよんだの。たすけて、って」

「それだけ、だったんですか……？」

「それだけ。あのとき、あのときはね。わたしをよぶひとはいなかった。だれもがかなしいきもちだったの。なのに、わたしにはたよらなかった。わたしのはんしん……はかいのかみにはすがったのに」

ソルは十年前の神和ぎたちのことを言っていた。シファはそのことを理解したが、何も言うことはできなかった。それは自分も含めた神和ぎに向けられた言葉だと思っていたからだ。

神和ぎは、天空、蒼海、大地の神しか信仰しない。それは魔法使いの領域に踏み込まないためだ。だが、十年前に魔法使いたちの王との大戦が終結するまで、強大な力を持つとされていた破壊の神の力を対抗手段として振るおつとする神和ぎたちは確かにいた。だが、破壊の象徴たる火を以て死を与えようとは

すれど、創造の象徴たる木を以て生を与えようとする者は、あの昏き時代にはいなかった。ただ一人を除いては。

「だからあの時も、ヒビナさんに、その……口づけを」

「やつとひびなにおかえしできるとおもったから」

「おかえし？ 十年前はソルさん率いる五神とヒビナさんで勝利したのでは……」

「……」

「ううん。わたしはかてなかった」

「そ、そんな……！ 神通力の最高位たる神で勝てないのなら、一体どうやって！」

「すいは」

「すいは」

「スイハ……さん、ですか？」

「うん。かなぎとまほうつかいのまじったひと」

「……う」

魔法使いたちの王を敵と定めても、決して手を取り合うことのなかった神和ぎと魔法使い。今も続くその深き溝の底に生まれてしまった人がどういう扱いを受けるか、シファは想像に難くなかった。

「そして、ひびなのししょう」

「師匠なんですか！？」 じゃあヒビナさんを特質の修行と称して雪山へ置き去りにしたのも……」

「……」

「あとこいびと？」

「な、なななな……」

次々と明らかになる衝撃的な事実には、シファの頭はこんがらがる一方だった。

「びっくりです……。その方は今どいらいっしやるんでしょうか。とても会

ってみたいのですけど……」

「……………」

「？ どうしたんですか？」

珍しく歯切れの悪いソルを見て、シファは不思議に思いはすれど、その理由を考えまではしなかった。

意識から勝手に除外していた、とも取れる。ヒビナの余りの強さに、きつと大丈夫だろうと、シファはそう思っていた。

「しんじやったの。ひびなをたすけて」

シファの心臓が激しく脈を打つ。

そんなはずはない。だって、そうだったら歴史に名を残しているはず。今のヒビナがあるのはその人のお陰、今の世界があるのだって、その人のお陰だ。

しかし誰もその名前を知ることはない。なぜなのか、どうしてなのか。

「さいごまでみてたのは、わたしだけ」

「最期……」

「おうはつよかった。わたしたちがぜんいんいてもまけるくらい。ひびなもすいはもしにかけで、もうおわりだとおもった。でも……」

ソルは寝返りをうつた。シファに背を向けるように。焚き火の方を見るように。

「スイハは肉体と精神を、全部魔力の燃料にしたの。それをヒビナに託して、彼女は消えた。この世から、完全に」

人がいない図書室。本校には及ばないとはいえ、かなりおおきなこの空間で、二人っきり。もちろんそれは比喻で、自習スペースとかにはいるんですけど、私たちの目に入る限りでは誰もいない。

紫 子「……」

図書室ではお静かに。委員である私たちはその忠告通り、黙って本を読んでいた。

嘘です。少なくとも、私は。

相変わらず格好つけて難しいタイトルの難しい言葉遣いの難しい本と面していますが、内容は全然頭に入ってこなくて、隣ばかりを気にしている。

隣の人。

名前は佐久間京太郎。

ひとつ上の先輩。鎖国少女に踏み込んだ初めての男の人。

最近知りました。私は鎖国少女と呼ばれているらしいです。名字の鎖雨と、誰も寄せ付けない様から、鎖国。

そんな私ですが、先輩にだけ開国してしまいました。なんちゃって。

さて、どうしましょう。こんなとき、どうしたらいいのかわかりません。

そばにいられるだけでいい、という気はしますが、もっと距離を縮めたい、とも思います。

……けれど、なにをすればいいのか……。

そのままその日の活動は終わってしまいました。

帰り支度を済ませ、図書室から出る。

校舎内になる自動販売機とベンチの前で。

京太郎「ちょっと座ろうか」

紫 子「はいっ！」

言ってほしかったことを言ってくれて、嬉しくなる。

京太郎「はい。鎖雨さん」

よく飲むコーヒー飲料を渡してくれた。

紫 子「ありがとうございます。ちょっと待って下さいね」

私はそれを受け取る前に、自販機で微糖コーヒーを買う。

紫 子「はい。先輩」

京太郎「ありがとう」

飲み物の交換、同じ価格だから自分で買ったほうが早いんだけど、お互いにお疲れ様ということで。こういうのは好きだった。

京太郎「新しいクラスはどう？」



紫 子「私は友達とかいないので、変わりません」

京太郎「あはは、そうか」

紫 子「先輩は、どうですか？」

京太郎「そこそこ話すやつは何人か、っていうところかな」

紫 子「ですか」

いざとなると会話の種が思いつきません。ですが先輩が話題を提供してくれます。私は先輩にされた質問をそのまま返すだけ。

京太郎「長々と話しちゃったね、ごめん」

紫 子「いえ、私も楽しかったので」

京太郎「ならよかった。じゃあ、帰ろっか」

紫 子「はい」

帰宅の方向は間逆なので、先輩とはすぐにお別れ。

京太郎「また来週、鎖雨さん」

紫 子「はい。また来週です」

一週間で一番楽しい日が終わる。

夜、ベッドで考えます。

どうしようか。これから、どうしようか。

なんだか、一人会議がこの頃のトレンドになってる。

???『ごめんね、かまってやれなくて』

最近会っていない親の顔が浮かびます。

???『お前は素直に生きなさい。我慢なんかするんじゃない』

私は我慢する子どもと思われていたらしいです。おもちゃもなにも、ねだったりしなかったのも、それは我慢じゃなくて、なにも欲しくなかったから。

今の私はどうだろう。

我慢、してるのかな？

紫 子「キス……したいな……」

声に出てた。それが答えだった。

つい1ヶ月前を思い出す。

あの日。

思い出す。

顔が赤くなる。

胸が、あったかくなる……。

紫 子「……よし！」

きめた。

染 衣「でもね、私はそう思わないのよ」

京太郎「というと」

染 衣「だって、疲れるじゃない」

京太郎「？」

染 衣「新しいことに挑戦するのはいいことだけど、そればかりだったら疲れるよね」

京太郎「まあ、そうですね」

染 衣「だから、昨日と違う今日ばかりじゃなくて、今日と同じ明日もあっていいと思うの。私たちにはそっちのほうが必要」

京太郎「なるほど。たしかに」

染 衣「でしょ」

とりとめのない会話。

普通の会話。

人と話していて楽しいのは久しぶり。

染 衣「えへへ……」

京太郎くんとおしゃべりするのは楽しい。

聞いてばかりじゃなくて、私からも喋れるから。

京太郎「あ、そういえば、依頼来ましたよ」

染 衣「そうなの！ やったね」

京太郎「これも染衣さんのおかげです」

染 衣「そんなことないよ。京太郎くんの功績だよ」

京太郎「でも染衣さんが流してくれたから」

京太郎くんはちょっと変わった活動をはじめました。

人助けで、しかもちょっぴり不思議な感じを出したもの。

学園には不思議な炊飯器があり、その隣りにあるポストに願い事を書くと叶う、というもの。

会話の中でその場のノリで話していたことを実践してみた。

学園掲示板で噂を流して、それを見た誰かが私に話す。そして私が「知ってますよ」と言う。

私が言うと、なぜか説得力が増すらしい。

たったこれだけで不思議の誕生。

でも、ね。

染 衣「最初の依頼じゃなくて、二番目の依頼、ね」

京太郎「？」

染 衣「一番最初は私……なんて」

京太郎「あはは。そうですね」

冗談交じりに、でも、それが一番大切だと思ったから。

A Wonderful Table.

紫 子（すすっ）

いつもの図書委員。イスを近づける。

京太郎「……」

無反応。

紫 子「今日もよろしくお願ひします（ぎゅっ）」

ちょっとあざとく腕に抱きついてみる。

京太郎「どうしたの鎖雨さん」

反応あり。

……でもなんかちょっと違う。

紫 子「ねむくなっちゃいました（こてっ）」

先輩の肩に寄りかかって目を瞑る。

京太郎「ふふっ……」

優しく笑われる。

紫 子「全敗です……」

もしかして女の魅力皆無？ なんて思ってしまう。

ちょこんと胸に手を当てる。

紫 子「まだ成長期」

何をしてもまるで妹みたいに扱われる。

紫 子「でも、妹じゃないよね」

もちろん。

たとえば、名字で呼ばれてるし。

紫 子「そうだ！」

何が物足りないって。

紫 子「せ～んぱいっ！」

後ろから目を隠す。

紫 子「だ～れだ」

京太郎「えっと、鎖雨さん？」

紫 子「違いますよ」

京太郎「鎖雨さんだよね」

紫 子「私の中の名前は、なんでしょう？」

京太郎「紫子……さん？」

紫 子「はいそうです。でも、呼び捨てで」

京太郎「紫子」

紫 子「♪ じゃあもう一度。だ～れだ？」

京太郎「……紫子」

紫 子「正解です」

手を離す。

紫 子「えへへ」

紫 子「これからもそう呼んでくださいね」

成功です！

京太郎「紫子、あんまりくつつかれると暑い」

京太郎「寝るのはいいけど、風邪引かないようにね」

京太郎「はいはい。紫子」

紫 子「より妹っぽくなりました……」

なにが駄目だったのか……。

妹っぽいから？

そうだ。

紫 子「だったら、妹が絶対しないようなことをすれば……」

そしてそれは、私の最初の望みと一致することに気づいた。

紫 子「先輩」

京太郎「なに？ 紫子」

こっちを向かずに返事。なんだかそっけないけど、この距離感がむしろ……。

なんて悦に入っていないでチャンスだ。

行け！ 勇気を出せ私。

先輩の横顔を見つめる。

ドキドキする。

足の方から、血が流れてくるのがわかる。

紫 子「ちゅっ」

頬にそっと口づけた。

京太郎「えっ！？」

こっちを向く先輩。驚く表情。

紫 子「えへへ……」

でも私にはその問いに答えることはなく、余韻に浸る。

京太郎「紫子、今なにを……」

その時の私は、先輩そっちのけで、すっごくイイ顔をしていたと思います。

A Wonderful Table.

11時55分。これからの流れをちょっと考える。染衣さんとお出かけ。一昨日のお詫びを兼ねて？いや、そうじゃないだろう。

染衣『うん。そういうのはもう言っこなし。みんな悪い、ね』

と言ってくれた。だから今日は、染衣さんと一緒に楽しもう。純粹に、純粹に。

時間どおり。前と同じ待ち合わせ場所。

染衣「こんにちは、京太郎くん」

京太郎「こんにちは……！」

ミニスカートを履いた、いつもと違う印象の染衣さんは。

俺が見た中で、一番。

京太郎「可愛い……」

染衣「え、えへ。そうかな……」

京太郎「ここで良かったの？」

昼食に選んだのは、前と同じコーヒーショップだった。

染衣「ここがいいの。だって、京太郎くんの行きつけの場所でしょ」

京太郎「うん」

染衣「だから、ね」

京太郎「染衣さんは行きつけの店とかあるの？」

染衣「特にないかなあ」

京太郎「毎回違うお店に行く感じ？」

染衣「あまり外出しない感じです」

京太郎「そうなんだ。前からちょっと思ってたけど、染衣さんって結構インドア派だね」

染衣「そうだよ。家でごろごろするのが趣味です」

京太郎「いいね」

染衣「京太郎くんは、どっちも、かな」

京太郎「家で京子と一緒にレンタルした映画見るか、外に出るか、かな」

染衣「映画。いいね」

映画の話で盛り上がった。

染衣「今度一緒に行こうよ」

なんて自然と次の予定が立ったり。

染 衣「じゃあ、行こっか」

そして俺たちはショッピングモールへ向けて出発した。

キユウセイの魔女とその騎士

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

その屋敷は、イルミナの外れにあった。イルミナの街の、夜も眠らぬ喧騒が嘘のように、静けさが辺りを覆っている。道を優しい風が抜けていった。

「レンカート家の屋敷には、血族と極一部の使用人、そして招かれた客しか入れない。今は一層警戒しているはずだ。だから、先に話をつけてくる」

「その姿で大丈夫なの？」

マキナが二人を制して歩き出す。アデルの問いには振り向かず、手を挙げて答えた。

「ホント不便だよね。何とか元の姿に戻れないかな？ 師匠とは話してると思っただけど」

「……そうね。私も、そう思う」

アデルが複雑そうな表情で返した。マキナの今の姿は、他ならぬ彼女の手に与えられたものであり、その気になればいつでも戻すことが出来た。

断ったのは、マキナ本人である。その事実を、彼女がノエルに伝えることは出来なかった。

「やっぱり、元の方がいい？」

「そりゃ、まあね」

「そうよね、だってマキナはノエルの——」

「待った待った！ そういうこと外で言わないでよ！」

「誰も聞いていないじゃない」

「そうだけど！ それでも、恥ずかしいし。……んもう！ そんなニヤニヤした顔を向けんなっ！」

「何言ってるの。これが私の普段の表情よ……ふふ」

「んなワケないでしょうが！」

アデルが、ノエルのマキナに対する想いに気付いたのは、驚くべきことについて最近の話であった。更にもう一つ驚くとすれば、ノエルはアデル以外の誰にも、気持ちが悪くはないと思っていることだが。

昨晚、マキナが野暮用で宿の部屋を出たときのことである。

「ねえ、ノエル。一つ聞きたいことがあるんだけど」

「な、なにかな？ もしかして、マキナが死——」

「あなた、マキナに対して憎からず思っていたりするのかしら？」

「ふえ！？ な、なにを言ってるのかさっぱりだよ！ ホントだよ！」  
突然の直球にノエルは、何も言わない方がまたマシと評されそうな  
驚きぶりを見せた。

「ふむ、やはりね」

「否定してんじやん聞けよお！」

「じゃあ嫌いななの？」

「……嫌いじゃないです」

「じゃあ普通なの？」

「……普通でもないです」

「じゃあ——」

「誘導尋問じゃん！ ズルいよお……」

「ええ？ ごめんさない、こんなに取り乱すなんて思わなくて」

泣きそうな表情を浮かべるノエルを見て、アデルが慌てて頭を撫で  
ながら謝罪した。

「会ってそんなに経つわけじゃないけどさ。でも、大変な時に助けて  
くれたし、マスターのことももちよくちよく話すし。いい奴だなんて」

「……そう」

「まさかアデルに気付かれるとはなあ」

ノエルが顔を赤くしたまま感心したように言った。

「私、恋つていうのはよく分からないんだけど、あなたを傍で見たい  
て、もしかしたらと思ってるね」

「いや、アデルはすつごく鋭いよ。びっくりだなあ」

あの酒場にいる大半の人間は、彼女の向ける好意に気付いている。  
というよりも、傍から見れば誰にだって分かりそうな対応を彼女はし  
ている。その内に入らないのは、等の本人、マキナと、あとは童貞ぐ  
らいのものだろう。

「あ、ところでさ。アデルはマキナのこと……どう思ってる？」

「そうね。彼は博識で、腕も立つし、いざというときは引っ張ってく  
れて……素敵な人じゃないかしら」

「そ、それって……」

「でもまあ、多分だけど、異性として好きっていうのはないかしら。  
経験がないから分からないけれど」

「……あ。そっか——」

「今、焦ったでしょう？」

「んなっ!？」

「いやあ、可愛いわね。こう、ついからかいたくなるいじらしさって  
やつがね」

「純情な乙女心で遊ぶなっ!」



ノエルが顔を真っ赤にしてアデルに飛び掛かろうとしたところで。

「どうしたどうした。随分愉快なことになってるけど」

「……………」

「……………え、何どうしたんだ？」

「話、聞いてた？」

「いや全く」

「……………寝ます！」

「お、おう。おやすみ」

ノエルはうつ伏せでベッドに飛び込み、そのまま起きてこなかった。

まだマキナは戻ってこない。

恥ずかしさから背を向けたままのノエルを見つめながら、アデルは物思いに耽っていた。

今朝、ノエルが起きてくる前にアデルはマキナに相談を持ち掛けていた。

「元の姿に戻すって？ 急だな」

「当初は、傍に男性を置くのは少し心配だったから。でも、あなたならその心配はないと思っ」

「それは嬉しい話だな。……でもまあ、いやいや」

「……………え？ 本来のあなたの姿に戻れるのよ？ 断る理由なんて——」

「今は、ほら。シルメリアっていう、この体の力が必要だから」

「それなら、その力が必要なときだけ変わればいい。別に切り替えは今の私なら難しくないから」

「……………なんだ、俺に男に戻ってほしいのか？」

「それは、その……………」

「さっきの話に答えるなら、この力は常に必要なんだ。だから、特に理由がないならこのままでいい」

「……………そう。分かったわ」

ノエルを慮つてのアデルの行動は失敗に終わった。他方に気持ちに向かっていた彼女が気づくことはなかった、そのときのマキナの表情に、陰りが差していたことに。



外れの土地を存分に使った屋敷とその庭は、小さな村なら十分に覆いそうな面積を誇っていた。それでも、草木は綺麗に切り揃えられ、よく日の当たる花壇では色とりどりの花々が見る者を楽しませる。

「そう固くなるなよ。大した場所じゃない」

「いやいやいや、この屋敷何部屋あるのさ」

「約四十部屋ございます」

「ま、隠し部屋とかも含めるとそれ以上だけどな」

「……マキナ様」

「じゃあ聞かなかったことにしといてくれ」

「ええ……」

ノエルが呆れたように声を漏らした。

廊下を先導して歩くのは、マキナと家に仕える執事のキンゼイだ。

長くレンカト家に忠誠を誓う彼は、真っ白の長髪を結わえ、背も真つすぐに高く伸びていて、齢による衰えを少しも感じさせぬ佇まいであった。

「あれ？ この家に入れるなら宿じゃなくてここで寝泊まり出来なかったの？」

ノエルの尤もらしい質問に、マキナはしばし逡巡した後で答えた。

「別に、ノエルやアデルがそうしたいなら用意させる。……でも、俺

はいい。宿に戻る」

「え？ なんでさ。主がいらないのに私たちだけやっかいにはなれない

でしょ」

「……ノエル様。マキナ様は、その——」

「いい思い出がないんだ。あんまり長居はしたくない」

キンゼイの言葉を遮って、マキナが本心のままを口にした。

「ここに来たのは、服を調達するためだ。他にアテがなかったからな」

マキナの言葉にアデルとノエルが首を傾げる。

「服？」

「ああ。明日、俺が大公と謁見した後、新たなクラスS誕生を祝うパーティーがある。いわゆる舞踏会ってやつだ」

「へえ。それでドレスが必要ってわけね」

屋敷の廊下をしばらく行くと、キンゼイが立ち止まって振り返った。

「ではこちらの部屋に、侍女が寸法を取りますので。申し訳ありませんが一日で仕立てるのは不可能なので、近いサイズのものを取り寄せいたします」

部屋の前で立っている二人に、マキナが声をかける。

「……ん？ 早く来いよ」

「いや、なんで私が行くのよ」

「なんでって……。お前たちも同伴するからだが」

「……あれ？ え、えーっと。はあッ!？」

「ちょっとマキナ、聞いていないんだけど」

「だって言っていないし。サプライズだよ、サプライズ」

「待ってよ！ 無理だつて私は！ ちょっと前まで田舎の農村にいた  
ようないもくさい娘なんだよ！？」

「自分で言うなよ……。いやき、前に話したことあったろ？ 酒場で  
さ。俺が、昔はそういう社交界にも引つ張り出されて迷惑だったつて  
語ったら——」

『ありえない！ 舞踏会つて言えば女の子たちの憧れでしょ！』

『それで王子様に見初められちゃったりして！ お伽噺のド定番！』  
「みたいなこと言つてただろ？ てつきりはしやいで喜ぶかと思つて  
いたんだが……」

「いやいや、マジで呼ばれたらプレッシャーが……。ああ、胃が痛くな  
つてきた」  
腹を押さえながら壁に手をつくノエル。

「まあ、それなら別にキャンセルでも——」

「待ちなさい」

マキナを制止して、アデルがノエルの肩を抱いて言い放った。

「……参加します！」

「ええっ!？」

「いや本人が——」

「黙りなさい。ノエルは今、少し萎縮してしまっているだけなの。こ  
こで行かなかつたことをいつか後悔するわ。だから私がその背を押す」

「まあ、確かに滅多とない機会だ。……。どうする、ノエル？」  
目を上下左右に泳がせながらノエルはパニック状態に陥っていた。  
そんな彼女の耳元でアデルが囁く。

「聞いて。これは必ずあなたの為になるわ。私を信じなさい」

「……？」  
マキナの耳には届かない、小さな宣誓を聞いて、ノエルは俯き震え  
ながらも呟いた。

「い、行きます。出ますッ、舞踏会！」

「何をそんなに熱くなっているのかは分かんが、新しいことに挑戦  
することはいいことだぞ」

「あ、それはそうと私の採寸のときは部屋から出てね」

「はい」

部屋にいた侍女が手早く三人の採寸を終わらせると、キンゼイと一

言二言交わした後に屋敷を出て行った。

「メイドさんと何か話してた？」

「……少しな。キンゼイ、部屋の準備を頼めるか？」

「畏まりました。すぐに」

「あれ、宿に戻るんじや」

「気分が変わった。やることも出来たしな」

「やること？」

「気にするな。それより、晩を楽しみにしておけ。キンゼイの飯は旨いぞ。……あれから、ウデは変わらんか？」

「いいえマキナ様」

「ん？」

「……この半年で、更に上達したと自負しております」

キンゼイの気の良くなるような笑みに、マキナも釣られて笑っていた。

「そうか、それは楽しんだ」

「ありがたき幸せ。お二方は好みの料理、あるいは苦手な食材はありますか？」

「えーっと、私は特に……」

「肉と野菜ね。量が多いほうが好ましいわ」

「アデルは1・5人前で頼む」

「畏まりました。それでは客間にご案内いたします。私は仕込みにかかるので、部屋の準備が出来次第、人を呼びに参らせますのでお待ちください。マキナ様は……」

「自宅だしな。自分の部屋に戻るよ」

「はい。お出かけの際は使用人の誰かに一度お声かけください」

客間に入り、キンゼイは一旦姿を消した。

「あなたの部屋気になる！ 見に行つていい？」

「見て面白い物なんてなにもないぞ。山のような教科書や指南書くらいしか……あ、そういや錬金術関係も少しはあったかもな」

「マジで！？」

「後でそちの部屋に持つていく。だから入んな」

「……………」

「あれ、どつたのアデル？」

「いや、意中の男の部屋に結構積極的に入ろうとするのね、と思つて」

「ふえあッ！？」

アデルにひそひそと言われ、ノエルは耳の先まで真っ赤にして叫び声を上げた。自覚がなかったらしい。

「さっきから俺に聞こえないようになにを吹き込んでいるんだアデルは……。まあいい、俺は自室の整理でもしてるから、気楽に過してくれ」

そう言つて、マキナは足早に客間を去つていった。

「ついて行かないの？」

「あんなこと言われて行けるか！」

続く